

重要文化財 久我家文書の補修について

目 次

はじめに

一 重要文化財指定に至るまで

二 補修の準備

三 補修の内容

1 基本方針

2 仕立

3 補修着工

4 経過と現状

おわりに

磯 貝 幸 彦

## はじめに

久我家文書が国の重要文化財に指定されたのは、昭和六十三年六月六日である。

この報告は、本文書が指定に至るまでと、指定後現在、実施されている補修についての経過報告である。久我家文書は、本学図書館が所蔵する貴重な特殊資料の一つである。

はじめに、久我家文書が本学図書館に架蔵された経緯について簡単に触れる。

久我家は、近衛家や九条家と並ぶ清華公家の筆頭であり、同文書は平安時代後期以来幕末に至る久我家の所領を中心とする記録文書類が一貫伝来したと言うことにおいて格別に貴重な特質を保有する文化財となっている。今日伝存する公家文書の中で、その質・量において屈指の一大古文書群である。

久我家と本学の縁故は、明治維新、王事に奔走した久我建通卿が、明治十五年、本学の前身、皇典講究所開設に当たり、その初代総裁有栖川宮熈仁親王を補佐して、副総裁に就かれたことに始まる。

昭和五年、この御縁故深き久我侯爵家は、同家に襲蔵されてきた大切なこの文書を本学へ寄託することを快諾せられた。次いで、昭和二十六年四月三十日、その全部を学術研究に資するため御当主久我通顕氏は正式に大学に譲渡されたのである。

以来、本学では、学問発達に寄与するため同文書のマイクロフィルム化をはじめ、これが翻刻に努めた。

一方、折口博士記念古代研究所に所蔵されていた『久我家所傳當道関係文書目録』（村田正志編）記載文書についても、その全てが図書館に移管（昭和六十二年四月十六日付）され、ここに久我家文書は図書館の所蔵となった。

昭和五十七年、わが國學院大學が、その創立百周年を記念する事業を行わんとしして取り上げられたのが『久我家文書』編纂刊行の計画であった。小川信教授を委員長とする久我家文書編纂委員会が設置され、この事業は、その後、五年に亘る担当者の多大な努力によって、昭和六十二年十一月、「別巻」（解説・編年総目録）を含む全五巻として公刊されたのである。

## 一 重要文化財指定に至るまで

これを機会に、本文書は、国の重要文化財として、指定調査の対象に取り上げられ、昭和六十二年七月二十八日には、その事前調査が文化庁により実施され、翌日、七月二十九日付（62保美第74号）で「久我家文書の調査について（依頼）」の通達を正式に受けたのである。これを受け、本学図書館長は同年八月七日付で調査の受諾を文化庁へ伝えた。

翌年、昭和六十三年一月九日付（63保美第3号）で、「文化財の借用について（依頼）」の連絡があり、その借用期間（昭和六十三年一月二十五日から昭和六十三年六月三十日）を伝えてきた。その後、昭和六十三年一月十二日・十三日・十四日の三日間に亘り、図書館第四閲覧室において、文化財調査官四名による文書調査が実施された。更に、文化庁は、本文書を重要文化財指定提案の候補として、その審議、検討のため文化庁の調査に基づく当該文書の目録作成方を図書館に指示するとともに、同年一月十二日付（庁保美第三十七号）で、調査対象となる文書の提出方を通達してきたのである。次ぎにその目録作成方の凡例と提出した文書の目録を掲げる。

### 凡 例

一、本目録は國學院大學図書館所蔵になる「久我家文書」（久我元侯爵家旧蔵）について、重要文化財指定の事務用に作成したものである。

一、久我家文書は、文書、記録のほか歌書、和歌懷紙、習字手本など典籍、書跡類を含む総数凡そ二千八百点を数えるが、今回の指定に際しては、文書、記録に限定し、本目録に掲げる二千四百三十五通を対象とした。対象とした時代の下限は原則として明治政府が皇族華族取扱規則を定めた明治四年迄とした。

一、本目録の排列は國學院大學図書館（以下図書館という）の台帳番号に従い、凡そ左記の順序に依った。

（1）『侯爵久我家文書目録』（國學院大學史学研究室編）所収文書（図書館台帳番号一〇九五〇）

- (2) 久我家旧蔵未整理分の近世文書(國學院大學久我家文書編纂委員会編『久我家文書』の所収順序に従い、繪旨、女房奉書、口宣案、御内書等に類別)(図書館台帳番号九五―二〇五〇)
- (3) 村田正志編『久我家所傳當道關係文書目録』(図書館台帳番号二〇五一―二三〇六)
- (4) 久我家旧蔵未整理分幕末維新關係文書(図書館台帳番号二三〇七―二四三五)
- 一、目録は次ぎの要領で作成した。

- (1) 番号は文書一通一番を原則とし、書繼案文等の複数の写文書を収めたものは、その所収通数に拘わらず、これを一通一番と数えた。
- (2) 記載の順序は、文書番号、文書名、年紀、法量、紙数、形状の順序に記した。
- (3) 目録に掲げた年紀の表記は、原則として原文書の表記のままとし、附年号は「」、端裏書等によって年紀の明らかなものは「」を施し、本文の推定にかかるものは( )に掲げた。
- (4) 中世文書の名称下には宛所を小字右寄せで記した。
- (5) 年紀未詳の文書の時代及び案文等の作成時代については、参考のためその推定時代を( )で注記した。
- (6) 法量は縦、横の順に掲げた。単位はセンチメートルである。このうち本来縦紙のままで貼り継がれなかったものについては各一紙毎の寸法を記し、折紙の縦寸法は開いた縦紙の状態で計り、続紙は全長を表示した。
- (7) 下段の「」数字は國學院大學久我家文書編纂委員会編『久我家文書』(五冊昭和五十七年から六十二年刊行)の記載番号で、へへは図書館台帳番号である。いずれも検索の便宜を考慮して加えた。

右の指示に従い、『國學院大學図書館所蔵久我家文書目録』(國學院大學図書館調査室編昭和六十三年三月十日発行)を作成した。また、提出した文書は次の通り。

## 目 録 (昭和六十三年一月十二日通達)

番号		請求番号		
一	右京大夫 <small>源雅兼</small> 宅牒案	保安四年二月三日	八二八	一八 久我家根本家領相傳文書案 自宝治元年十二月至正和二年四月 三〇〇
二	八條院廳下文	四月廿六日	五五	一九 春日社陳狀案 (年未詳) 三〇九
三	中院流家領目錄草案 (年未詳)	寿永二年九月廿五日	三四一	二〇 海東中莊檢注取帳 元亨肆年七月廿日 三四二
四	関東下知狀	承久三年八月廿四日	一二	二一 池大納言家領相傳系図 (年未詳) 五四
五	六波羅御教書	「承久三」九月十四日	九〇	二二 後醍醐天皇綸旨 七月二日 八〇五
六	六波羅施行狀	承久三年後十月七日	一三	二三 久我家重書目錄 元徳貳年十一月十三日 三三四
七	六波羅施行狀	承久四年四月五日	一四	二四 関東御教書 八月廿五日 八
八	関東御教書	「貞广元年」八月十五日	一	二五 関東御教書案 正慶元年八月廿七日 九
九	三條局置文	天福二年二月廿八日	四四三	二六 後醍醐天皇綸旨 元弘三年八月十五日 四四八
一〇	檢非違使別當宣	六月廿二日	七	二七 源御寿女避狀 けんふ元年八月廿四日 一一
一一	沙弥西念 <small>磯部光介</small> 壳券	建長八年八月廿日	一〇五	二八 池大納言家領相傳重書目錄 (年未詳) 三
一二	関東御教書	「文永五」六月廿三日	九一	二九 足利尊氏御判御教書 曆応元年十月廿日 七六
一三	関東御教書	十二月廿日	二五	三〇 足利尊氏禁制 建武三年七月十日 八七
一四	前大僧正某讓狀	建治三年四月十六日	三八	三一 足利直義裁許狀 康永元年八月廿一日 六五
一五	関東御教書	正安四年十一月廿一日	九二	三二 足利直義裁許狀 貞和二年四月七日 五六
一六	池大納言家領相傳文書案	自寿永三年四月至正安四年十一月	二九九	三三 室町將軍 <small>足利尊氏</small> 家御教書 貞和四年六月廿二日 一七
一七	池大納言家領目錄案 (年未詳)		五	三四 室町將軍 <small>足利尊氏</small> 家御教書 貞和四年六月廿二日 九三
				三五 梶原景貞請文 貞和四年七月廿五日 一九
				三六 佐藤幸清請文 貞和四年七月廿八日 二〇

三七	久我長通自筆書狀	十月廿五日	四四六
三八	久我長通讓狀	觀應元年八月十三〔日〕	八一〇
三九	覺空 <small>北畠親房</small> 自筆書狀	四月廿五日	二六二
四〇	後村上天皇綸旨	正平八年七月十二日	四六一
四一	武家執奏奉書案	〔文和二〕	一〇
四二	久我本莊檢注帳	應永三年十月 日	三四三
四三	久我莊檢注帳案	應永三年	八〇〇
四四	久我本莊成次分坪付	應永六年正月 日	三四四
四五	足利義持御判御教書	應永廿一年九月三日	八一
四六	北畠俊泰避狀	〔應永廿一〕十月廿五日	九六
四七	北畠滿雅避狀	〔應永廿一〕十月廿七日	九八
四八	木造莊文書案	〔應永廿一〕自九月三日 至十二月十一日	三〇七
四九	乙部伊豆守雜掌請文	應永卅年 <small>癸卯</small> 九月十一日	六七三
五〇	久我家領文書紛失案文并證判	正長元年六月十九日	三一
五一	道秀 <small>利藏</small> 壳券案	永享三 <small>辛亥</small> 年三月二日	一二八
五二	足利義教御判御教書	永享三年五月廿二日	一三〇
五三	丹後守護一色義貫遵行狀	永享三年八月十五日	一三一
五四	丹後守護代延永益信書下	〔永享三〕八月十六日	一二九
五五	播磨守護性具 <small>赤松滿祐</small> 書狀	〔永享三〕七月五日	四八一
五六	播磨守護性具 <small>赤松滿祐</small> 奉行人連署奉書	七月六日	四八二
五七	足利義教御判御教書	永享七年十二月十七日	一三二
五八	管領細川持之施行狀	永享七年十二月廿五日	一三三
五九	丹後守護一色義貫遵行狀	永享八年四月八日	一三四
六〇	丹後守護代延永益幸遵行狀	永享八年四月十日	一三五
六一	丹後守護一色教親遵行狀	永享十二年八月廿二日	一三六
六二	等寿壳券案	永享拾年 <small>庚申</small> 三月二日	一四二
六三	久我莊末次名主職補任狀案	永享拾年十月五日	六六三
六四	長谷川次郎法師丸支證案文	永享十二至享德三年	三二三
六五	長谷川国方請文	享德三年十月十五日	六七五
六六	東久世莊相伝系図	(年未詳)	五二
六七	東久世莊相伝系図	(年未詳)	五三
六八	久我家領不知行所注文草案	(年未詳)	二
六九	久我家領不知行所注文案	(年未詳)	四
七〇	室町幕府奉行人連署奉書	文明七年十二月十日	一一一
七一	室町幕府奉行人連署奉書	〔長享元〕月十五日	六二九
七二	東久世莊田數・年貢等帳案	明應二、文明十二年	七五一
七三	久我莊壇跡田畠目録案	明應三年	八四五
七四	久我家領内御料所帳	(年未詳)十二月廿七日	七五四

七五	久我家領内御料所帳	(年未詳)	七五七	九三	久我家領文書案	自永正十一至天文廿一年	三四六
七六	五箇莊御公領帳	(年未詳)	七五〇	九四	松井康之契狀	「元龜三」十月十七日	六四〇
七七	後土御門天皇繪旨	明応五年八月廿九日	一〇八	九五	信濃治毘契約狀	十月	六四一
七八	室町幕府奉行人連署奉書	明応六年六月廿日	一一二	九六	織田信長朱印狀	「天正參」七月十二日	一一八
七九	室町幕府奉行人連署奉書	明応六年六月廿日	一一三	九七	久我家領指出帳案	天正十三年五月十五日	七七二
八〇	斎藤孫三九郎請文	「明応五年」十月廿六日	一八一	九八	羽柴秀吉判物	「天正十三」十一月廿一日	一二〇
八一	久我莊名田・散田等帳并文書案	永正十一、明応四年	七五二	九九	上久我莊藏入帳	天正拾三年十二月吉日	七六五
八二	室町幕府奉行人連署奉書	永正十四年八月十九日	一一五	一〇〇	下久我莊藏入帳	天正拾三年十二月吉日	七六七
八三	妙心院然譽和与狀	永正拾四年九月十日	二二三	一〇一	久我上下莊給人方割帳	天正拾三年十二月六日	七六六
八四	後奈良天皇繪旨	大永八年二月廿九日	一一〇	一〇二	下久我莊家数書上	慶長二年卯月十日	八六〇
八五	室町幕府奉行人連署奉書	享祿二年九月廿七日	六二三	一〇三	上久我莊家数覺書	(年未詳)	八五九
八六	室町幕府奉行人連署奉書	「享祿二」九月廿七日	二三〇	一〇四	下久我莊家数覺書	(年未詳)	七九九
八七	室町幕府奉行人連署奉書	天文二年十一月七日	二三三	一〇五	四條隆資書狀案	十月十二日	三一
八八	室町幕府奉行人連署奉書	「天文二」十一月七日	一一六	一〇六	後伏見上皇宸筆伏見上皇御消息案	正安三年四月廿七日	四四五
八九	(二條天皇) 繪旨	永曆元年二月廿八日	八〇六	一〇七	久我家雜掌奉壳券	明応五年 <sub>丙辰</sub> 十二月五日	六九六
九〇	後奈良天皇繪旨	天文三年十一月十六日		一〇八	里村紹巴書狀	(天正十四年) 十月十二日	
九一	室町幕府奉行人連署奉書	「天文十七・七・廿五」	二四五	一〇九	後陽成天皇口宣案	文祿三年七月十七日	三七八
九二	室町幕府奉行人連署奉書	天文四年十一月六日	八〇七	一一〇	後陽成天皇口宣案	文祿三年七月十七日	三七九
		天文十五年十一月十五日	八〇八				

一一一	後陽成天皇口宣案	文祿三年七月十七日	三八〇	一二九	上卿久我通明請文控	九月十日	(二五七七)
一二二	後陽成天皇口宣案	文祿三年七月十七日	三八一	一三〇	上卿久我通明宣控	享和元年九月十日	(二五七八)
一二三	後陽成天皇口宣案	文祿三年七月十七日	三八二	一三一	上卿久我通明宣控	享和元年九月十日	(二五七九)
一二四	後陽成天皇口宣案	文祿三年七月十七日	三八三	一三二	藏人萬里小路植房書狀	十二月廿一日	(二六〇三)
一二五	後陽成天皇口宣案	文祿三年十月廿二日	三八四	一三三	藏人清閑寺秀定書狀	十二月廿五日	(二六〇四)
一二六	藏人頭園基福奉書	四月七日	(九八二)	一三四	德川吉宗判物写	享保四年五月廿一日	(七八二)
一二七	大外記中原師定請文	四月八日	(九八三)	一三五	德川家治判物写	宝曆十二年八月十一日	(七八五)
一二八	藏人頭坊城俊広奉書	九月廿五日	(九八四)	一三六	伏見天皇宸筆御和歌集断簡		九二七
一二九	大外記中原師定請文	十二月廿八日	(九八五)	一三七	伏見天皇宸筆御和歌集断簡		九二八
一二〇	藏人頭松本宗良奉書	十二月廿七日	(九八六)	一三八	當道座中一件覚書并請書控(折一四五)		(二八五八)
一二一	藏人中御門資熙奉書	十二月廿八日	(九八八)	一三九	久我家覚書等覚(折一一九)		(二八六〇)
一二二	大外記中原師定請文	十二月廿八日	(九八九)	一四〇	檢校座中式目(折一八二)		(二八二七)
一二三	右中辨広橋兼茂請文	十一月廿二日	(二〇一六)	一四一	竹村淡路守申渡書控(折一二)		(二八三一)
一二四	藏人葉室頼孝奉書	十月七日	(二〇四三)	一四二	藤本慶傳書狀(折一四三)		(二八三七)
一二五	藏人葉室頼胤奉書	五月一日	(二三三三)	一四三	當道由来書(折一六九)		(二〇〇〇)
一二六	中御門天皇口宣案	[享保九年十二月十八日]	(二三四八)	一四四	當道座配當物覚書(折一七七)		(二〇〇一)
一二七	大外記中原師守請文	享保九年十二月十八日	(二三四九)	一四五	當道座職事生嶋藤馬口上書写(折一七八)		(二〇〇二)
一二八	藏人裏松祐光奉書	十一月十八日	(二四五八)	一四六	當道座職事生嶋藤馬口上書写(折一六〇)		(二〇〇三)
				一四七	當道座職事生嶋藤馬口上書写(折一六七)		(二〇〇四)



一四八 惣録検校多喜川實和一口上書写 (折一六四) (二〇一〇)

〔下欄請求番号の内〕

一四九 通誠公記草案 (折一八三)

(二八六五)

(一) ナシは台帳番号

一五〇 大和国鎮撫総督府達

(二〇四九)

(一) 付は刊本番号

以上百五十通

昭和六十三年三月、文化財保護審議会における審議の結果、国の重要文化財「久我家文書 二千四百六十一通」として指定されることとなり、三月二十六日夕方、テレビ、ラジオで発表、翌日、二十七日朝刊で新聞紙上に報道された。更に、四月五日(火)から四月十七日(日)までの間、東京国立博物館東洋館 特別展示室において「新指定重要文化財特別展観」として一般公開を行うことになっている旨、文化庁より本学に伝えられた。その後、昭和六十三年五月二十日付(63保美第48号「文化財の返却について(通知)」)文書によって、調査及び展観に供した文書の返却を六月一日とする通知を受け、当日その手続きを完了した。

次いで事務手続きに移るが、文化財として指定後は、各都道府県教育委員会がその窓口となって文化財管理行政は進められる。東京都教育委員会は、同年六月二十三日(63教社文第二三五号)付で、久我家文書を国の重要文化財に指定する旨の通知が文化庁からあったことを伝達してきたのである。左に文化庁からの通知を掲げる。

# 庁保美第二六の二号

昭和六十三年六月六日

文部大臣 中島源太郎 「印」

貴学所有の別紙上欄に掲げる旧重要美術品等ノ保存ニ関スル法律(昭和八年法律第四三号)第二条第一項の規定により認定された物件と中欄の文化財を併せて、文化財保護法(昭和二十五年法律第二一四号)第二十七条第一項の規定により、下欄のよう重要文化財に指定する。

なお、この指定により旧重要美術品等ノ保存ニ関スル法律第二十七条第一項の規定による認定の効力は消滅した。

学校法人 國學院大學

(官報告示 昭和六十三年六月六日付け文部省告示第七五・七六号)

[官報]

上		欄		中		下		欄	
名 称 及 び 員 数	認 定 告 示	名 称 及 び 員 数	所 有 者	名 称 及 び 員 数	所 有 者	名 称 及 び 員 数	所 有 者	名 称 及 び 員 数	所 有 者
古文書の部									
紙本墨書伏見天皇宸翰 (正安三年四月廿七日) 一通	昭和八年文部省 告示第三百十二号								
紙本墨書 八条院廳下文(寿永二年九月廿五日) 一通	昭和八年文部省 告示第三百十二号	久我家文書 二千四百五十六通		久我家文書 二千四百六十二通					
紙本墨書 足利直義下知状(貞和二年四月七日) 一通	昭和八年文部省 告示第三百十二号								
紙本墨書北畠親房自筆書状 (四月廿五日彼敷地事) 一通	昭和八年文部省 告示第三百十二号								
署名ニ覺空トアリ									
紙本墨書四条隆資繪旨副状 (十月十二日本造庄事) 一通	昭和八年文部省 告示第三百十二号								
			学校法人 國學院大學						東京都渋谷区東 四十一―二十八

名 称 及 び 員 数		認 定 告 示	所 有 者	所有者の住所
古 文 書 の 部				
紙本墨書伏見天皇宸翰（正安三年四月廿七日）	一通	昭和八年文部省告示第三百十二号	学校法人 國學院大學	東京都渋谷区東 四―十一―二十八
紙本墨書（八条院廳下文（寿永二年九月廿五日） 足利直義下知状（貞和二年四月七日）	一通 一卷	昭和八年文部省告示第三百十二号		
紙本墨書北畠親房自筆書状（四月廿五日彼敷地事） 署名ニ覺空トアリ	一通	昭和八年文部省告示第三百十二号		
紙本墨書四条隆資繪旨副状（十月十二日木造庄事）	一通	昭和八年文部省告示第三百十二号		

ここに、久我家文書は昭和六十三年六月六日、正式に国の重要文化財となった。

## 二 補修の準備

この間、本文書の痛みが激しく補修を必要とすることが指摘され、本学図書館は文化財保護法の規定に則り、その修理方を文化庁へ申請した。次ぎにそれを掲げる。

重要文化財「久我家文書」（國學院大學所蔵）修理について

このことについて文化財保護法第四十三条の二第一項の規定に基づき左記のとおり実施いたしたく、ここに申請いたします。

### 記

一、国宝又は重要文化財の名称及び員数

久我家文書 二千四百六十一通

二、指定年月日及び指定書の記号番号

昭和六十三年六月六日 庁保美第二六の二号

三、国又は重要文化財の指定書記載の所在の場所

東京都渋谷区東四―十一―二十八

四、所有者の氏名又は名称及び住所

学校法人 國學院大學 東京都渋谷区東四―十一―二十八

五、管理責任者がある場合は、その氏名及び住所

國學院大學図書館長 林陸朗 東京都渋谷区東四―十一―二十八

六、管理団体がある場合は、その名称及び事務所の所在地

該当なし

七、修理を必要とする理由

年序を経て各文書共損傷が甚だしいため

八、修理の内容及び方法

未定

九、現在の所在の場所が指定書記載の所在の場所と異なるときは、現在の所在の場所

同所

十、修理のために所在の場所を変更するときは、変更後の場所並びに修理の終了後復すべき所在の場所及びその時期

未定

十一、修理の着手及び終了の時期

昭和六十四年四月一日（昭和六十八年三月三十一日）

十二、修理施工者の氏名及び住所又は名称及び代表者の氏名並びに事務所の所在地

未定

十三、その他参考となるべき事項

なし

昭和六十三年十一月三十日 学校法人 國學院大學

理事長 佐々木周二 印

文化庁長官 植木 浩殿

この申請は、同時に東京都教育委員会教育長、同渋谷区教育委員会教育長宛てにも提出した。その後、東京都教育長から事業計画書提出の紹介が文化庁からあったことが伝えられた（63教社文第一四七号―二 昭和六十三年十二月十二日「昭和六十四年度文化財関係国庫補助事業計画について（紹介）」）。

図書館は、早速、準備に入り、文化庁文化財調査官、修理業者（京都宇佐美松鶴堂）を交え、修理見積のため調査を同年十二月十九日・二十日の二日間に亘り、図書館第四閲覧室において実施し、以後、数回に及ぶ連絡調整の結果、年次計画としての大枠を決定した。

総事業費五八四七七千円（補助率五〇％）五ヶ年の継続事業とする立案に対し、文化庁はこれを認め、国庫補助の運びとなった。次いで、東京都からの伝達（元教文第一七〇号の二、平成元年五月二十六日）は、初年度の補助事業の総経費を三百五十万円とすることが内定した旨の伝達であった。これを、受け、初年度（平成元年度）分の修理内容の検討に入り、設計書を作成した。

### 三 補修の内容

## 1 基本方針

初年度分の内容は、重要文化財に指定された総数二、四六一通の内、第一号文書から第七十四号文書までを対象とした。

修理の基本方針は、本文書が当初のままに伝来している点に留意しつつ、その原状に復することを第一の柱とし、保存の良好なものは、繕い修理のままとして、他はすべて裏打をおこない、文書の伝存形態に応じて卷子、冊子、台紙貼等に仕立てることを基本とした。文書の裏打は、特別に検討を必要とするものを除き、卷子は二度裏打、冊子・台紙貼は一度裏打とし、古い装幀の施されているものは解装し、古い裏打紙は除去すること。また、本紙の虫喰穴及び破損箇所は細部にわたり、本紙と色調及び風合いを似せた同質紙をつくって繕い、美濃紙を用いて肌裏を入れることとした。

文書の繕いの作業は、その難易度により、A・B・Cの三段階に分類し、それに応じて慎重に作業を行う。本紙の天地には、それぞれ美濃紙にて足紙を付し、一度裏打の文書は、前後に足紙を付けて補強し、仮張にかけてよく乾燥させた後、更に美濃紙にて総裏打を施し、同じく仮張にかけてよく乾燥させる。

二度裏打の文書は、折れの箇所及び折れの生じる可能性のあるところには折伏紙を充分に入れて補強し、表裏両面に文字があり裏打をおこなえぬものについては、表裏両面から文字の妨げとならぬように繕いのみを丹念に行うこととした。

## 2 仕立

次に文書の仕立であるが、卷子装のものは、後に軸巻紙を充分に補い、中軸には充分乾燥させた杉の白太、軸首には木軸の切軸を付け、これに巻くものとする。更に、本紙の前には紋沙もしくは和染紙にて表紙を付け、八双は竹材、紐は組紐を用いる。また、単一の文書を卷子としてもは紙表紙を、複数以上の文書を卷子としたものには裂表紙を装してこれを区別する。

台紙貼の文書は、足紙部分を残し、化粧断ち（表具の工程で、仕上がり寸法に截ちそろえること）する。

そのほか、文書補修に使用する糊は、沈糊（じんのり、小麦粉から精製した純粹の澱粉を煮たもの）を使用し、肌裏紙には新糊を、裂

の裏打には古糊をそれぞれ適当に用いる。裏打紙には純生漉和紙を用いること。また、紙背の文字のある部分についてはすべて写真撮影を行うこととした。

以上のような基本方針のもとに「平成元年度文化財保存事業費補助金交付申請書」を作成し、関連書類を調べ、文化庁に提出したのは、同年五月二十六日であった。

### 3 補修着工

その後、請負業者も決定し、平成元年七月十七日付で、発注者・学校法人國學院大學理事長佐々木周二、請負者・株式会社宇佐美松鶴堂代表取締役宇佐美直八の間で、「美術工芸品指定文化財 保存修理請負契約書」の請負契約を締結し、同日付で着工、直ちに文化庁へ着工届けを提出した。こうして国庫補助が決定した。それにともない、東京都文化財保護条例の規定に基づく補助を受けることも認められ、国と同様の手続きを経て、九月十四日には補助金の額（二四二七千円）も決定した。

この間、昭和六十四年一月七日には、昭和天皇が崩御せられ、元号が「平成」と改められた。また、消費税法（昭和六十三年法律一〇八号、十二月三十日公布・施行）が、この平成と改元された四月一日から適用されたことによって、請負契約による請負金の税率の計算等、書類作成上で大変苦勞をすることとなった。

### 4 経過と現状

かくして、久我家文書の補修事業は開始された。この文書の補修作業は、すべて京都国立博物館内の文化財保存修理所において、先に契約を結んだ松鶴堂が施工している。松鶴堂は、文書等の修理を専門とし、文化財の修理や美術品の表装に、長い伝統と優れた技術を保持し、国からも高い評価を受けている補修業者である。

平成元年度から始められたこの事業も、五年目を迎え、補修対象となった中世文書の内、前年の平成四年度までに、要補修文書の七割強にあたる補修を終えることができた。詳細は別表の通りである。

(別表) 久我家文書補修実施状況

	平成元年度	平成二年度	平成三年度	平成四年度
卷子仕立布表紙	十六卷	七卷	二卷	二卷
卷子仕立紙表紙	三卷	一卷	三十七卷	十卷
台紙貼	十三紙	六十五紙	四十二紙	一一一紙
繕いのみ	二紙	七十七紙	五十七紙	二〇八紙
冊子			一冊	
裏書写真		四十五カット	一二八カット	一〇三カット

文書の補修にかかる前に、久我家文書全体の修理の基本方針を決め、それに基づいて具体的な技術的仕様を両者で話し合い、幾通りかの補修仕様を作り、前述した方針に沿いつつ実施してきた。更に、一年二年と補修作業の経験を積むにしたがって、逐次補訂を行って現在に及んでいる。その間、毎年、着工時及び進行途中、竣工時の三回に亘り、文化庁から担当調査官の指導を受けることができた。また、初年度分の第一号文書から第七十四号文書修理完成にあたっては、その事業竣工を文化庁及び東京都教育委員会へ報告するとともに、理事長・学長はじめ、学内を中心とする関係者に報告を兼ねて、平成二年四月十七日（火）午後一時三十分から図書館第四閲覧室において公開された。

解説は、文化庁文化財調査官湯山賢一氏にお願い申し上げた。

修理が進められる中で、重要文化財指定第七号文書「検非違使別當宣」の端裏書「別當宣 正親町所望□□□事」の□部分が「爲沙汰」の三字であることが判ったこと、同じく十二号文書「関東下知状」の端裏書「鎌倉下知正分這田・石作□□□」の□部分としが読めなかった「作」の下に「等停止守護使之事、承久三、八、廿四」とあることが判明したことなど新事実が発見できたことは大きな喜びであった。これらの点については、全体の補修が完了した時点で改めて報告したい。



尚、修理期間中の文書保存管理については、担当調査官から下記の意見書（平成二年六月八日）が伝えられた。

#### 久我家文書修理についての意見書

國學院大學図書館所蔵重要文化財「久我家文書」の国庫補助修理は、平成元年より同六年迄六ヶ年継続事業として、現在初年度分を終了したところです。初年度分につきましては、竣工確認と併せて修理事業を御理解いただく意味もあり、事業終了分を一応大学へ納入する形をとりました。

しかし乍ら当該物件は最終年次には全体を卷子、台紙貼、畳込み、冊子等の形態別に分類し、個々の法量を採寸して、これを収納する簞笥状の保存箱を作成しなければなりません。この保存箱作成には形態別の文書仕上がり寸法に基づいて行われるもので、寸分の誤りなきように細心の工夫をもって行われます。また、各年度毎の仕上りも前年度分の仕上り風合が参考となります。

以上の点を考慮しますと、当該物件を事業完了時迄、文化財保存修理所宇佐美松鶴堂工房（京都国立博物館内）に於いて保存管理する方が修理工程上には都合良いものと判断されます。これらの点を踏まえ、今後の修理事業の円滑化を計るため、大学当局の御高配を賜りたく宜しくお願い申し上げます。

（平成二年六月八日 文化庁文化財保護部美術工芸課 文化財調査官 湯山賢一「印」）

大学は、右の意見書を了承し、文化庁の意見に従った。また、平成二年度の補修を終えたとき、全体計画の見直しがなされ、平成三年三月十五日付で左記の如く計画の変更が伝えられた。

#### 重要文化財久我家文書の修理事業の計画変更について

久我家文書修理事業は平成元年度より総経費五八四七七千円（補助率五十％）五ヶ年継続事業として計画され、平成二年

度段階で八八七八千円の事業分を終えたところであります。当初計画によれば第二年次以降各年一三七二七千円の予算規模を継続して行う予定でしたが、平成二年度予算は文化庁修理予算枠内の他事業との兼ね合い等もあり、五三一〇千円しか実行することができませんでした。また当初事業計画では、かなりの文書を裏打修理の方法で行う計画でしたが、事業進捗にともない、当該文書料紙の状態が痛みの割にしっかりしていることなどが明かになったため、裏打修理よりも手数のかかる繕いのみの修理を行う物件が増え、このため修理工程上にも当初計画よりは時間を必要とする傾向にあります。これらの点を踏まえ、よろしく補助事業者の御理解を得て、当初五ヶ年計画事業を別紙の通り六ヶ年継続事業に変更しようとするものです。

ところで久我家文書は現存する代表的な公家文書として、かなりの文書が当初のままに伝わっている点に価値が高く、その取扱いには十分な訓練をうけた専門職員が必要であることはいまでもありません。今回の修理にあたり、刊本久我家文書の不明な箇所や誤りを正すことができ、端裏書や裏花押、文書の継目、文書の旧状等に新知見を得ることができましたことは、優れて貴館専門職の御協力によるものであり深謝致す次第です。久我家文書の歴史的重要性に鑑み、文書の保存、修理上できうる限りの最高の修理を行っている現在、今後の取扱い・保存・公開上に万全を期すため、なお一層の御配慮を希望いたします。

(別紙)

重要文化財久我家文書修理事業計画表

	当初予定	変更計画
平成一年度	三五六八	三五八六
二年度	一三七二七	五三一〇
三年度	一三七二七	一二四〇〇
四年度	一三七二七	一二四〇〇
五年度	一三七二七	一二四〇〇
六年度		一二三九九
総計	五八四七七	五八四七七

〔単位 千円〕

但し、各年度配分額は概数です。

また六年度には監督旅費・写真費が若干加わります。

(平成三年三月十五日 文化庁文化財保護部美術工芸課文化財調査官 湯山賢一「印」)

現在、平成五年度分の事業も終わろうとし、完了まであと一年を残すところとなった。ところが、平成五年十二月十六日・十七日両日の監督・指導のおり、文化庁は、要補修文書の残存量及び収納箱製作等諸事情を勘案して、平成六年度中に完了させることは困難と判断され、調査官より、口頭で、再度の計画変更が必要であることが伝えられた。

### おわりに

これまで、文化庁の指導を受けて実施してきた久我家文書補修の実情を、時間を追って述べてきた。これほど大掛な文書の補

修は、本館にとっては、はじめての経験であり、今まで実施していた修理製本とは異なっており、多くの新知見を得ることができた。

史料の原形保存をその第一の柱とし、現状を維持し、変更を極力避けることを常に念頭において仕事を進めてきた。以前、(多くは江戸時代)に補修されたものの解装にあたっても、その事を十分に留意しつつ補修は進められ、その現状に復することが可能となる配慮がなされている。

先に、少しく触れた「正親町所望□□事」の□部分が「爲沙汰」と判明したのも、裏打紙を慎重に、丁寧に処理することによって得られた成果である。また、剥れ落ちた符箋一つでも、その虫喰穴等によって、その位置が確定できることもあり、何気なく貼付られている符箋の位置にも、重要な意味がひそめられているかもしれないと思うとき、補修作業の時点で解決できない問題は、できる限り原形に復することを念頭において、現状維持に努めるとともに、補修を施したものについては、常にその時点の補修作業の現状に復せるように仕事を進めてきたのである。

また、重要文化財の指定を受けたことによって、本文書の価値が変わるものではないが、一方において、その保存については、国の監視と保護が加わったのであり、利用についてもまた法に基づく保存の枠内で、広く公開する義務が課せられることになる。本報告にあたっては、文化庁文化財保護部主任文化財調査官湯山賢一氏、文化財調査官中村順昭氏の御指導を受けた。手続きの上では、東京都教育庁生涯学習部文化課竹内文隆氏、金田昌工氏、下城正二氏はじめ、多数の方々御指導と協力をいただいた。

また、実際に作業を担当してくださった田中保氏、竹内朋世氏、西本昭子氏はじめ松鶴堂の方々の協力と御示教を得た。記して深謝の意を表わすものである。

(國學院大學図書館整理課長兼調査課長 磯貝幸彦)